

第4室 楽器 展示解説

N-102 七弦琴（しちげんきん）

胴の内部にある墨書から、中国・唐時代の開元 12 年（724）に琴材の産地として知られた四川省彭州（ほうしゅう）で作られたことがわかる、七弦琴の名品である。桐製で全体に黒い漆を塗り、表面に弦の押さえどころを示す 13 個の螺鈿の徽（き）を埋め込む。漆塗膜の表面には、細い線状の牛毛断（ぎゅうもうだん）や渦巻状の梅花断（ばいかだん）などの断紋（だんもん、細かい亀裂）が多く見られる。こうした断文は、その物が経てきた長い年月を象徴するものとして、古くから賞玩の対象とされた。

N-107 彩絵鼓胴（さいえこどう）

伎楽に用いられたとみられる鼓の胴。乳袋（ちぶくろ）の縁と中央に二条の、棹の中段に三条の筋を造りだし、棹には複弁の蓮弁文を、その他の部分には宝相華（ほうそうげ）文をそれぞれ纏綯（うんげん）彩色で描く。彩色の剥落が著しいが、N-108 の「彩絵鼓胴」とともに製作当初の華やかな姿が偲ばれ、奈良時代の貴重な作例である。乳袋内部に記された墨書「三 鵜東院」は、法隆寺東院の三之鼓を意味し、当時法隆寺で「東院」の呼称がすでにあったことがうかがえる。

N-108 彩絵鼓胴（さいえこどう）

N-107 の「彩絵鼓胴」と同様に伎楽に用いられたとみられ、棹には蓮弁文を、その他の部分には霊芝雲や宝相華（ほうそうげ）文を纏綯（うんげん）彩色で描いている。口縁近くに魚々子地に花文を毛彫りした六弁花形の吊鐙金具をつける。全体に量感豊かな堂々とした姿は、いかにも奈良時代らしい。乳袋内部の墨書「鵜東院二」は法隆寺東院の二之鼓を意味している。

N-109 黒漆鼓胴（くろうるしこどう）

乳袋内部の墨書から法隆寺で聖霊会（しょうりょうえ）に用いるものとして、南北朝時代の延文 2 年（1357）に薬師寺伝来の三之鼓を写して製作したことがわかる。桐材を轆轤（ろくろ）挽きで成形し、表面は黒漆塗り仕上げで、内部は素地のままとする実用的な鼓胴である。

裏面に続く

N-106 羯鼓（かっこ）

羯鼓は、鼓胴の両端に鼓皮をあて、調緒（しらべお）でしめて組み立て、木製台にのせ、両手に持った桴（ばち）でたたいて演奏する。天保 13 年（1842）の『御宝物図絵 追編』（ごほうもつずえついへん）では「石筒羯鼓」と記され、長らく瓦製鼓胴とされてきたが、近年の X 線透視写真による調査で木製であることが判明した。鼓胴の外面に獅子牡丹を彩色で描き、両端は黒く縁取り、切箔（きりはく）で連珠文をあらわす。

N-110 羯鼓台（かっこだい）

羯鼓をのせて演奏するための木製朱漆塗りの台。刳（く）り形をつけた 2 枚の板脚の間に天板をはさみ、両端上部に突起をつける。天保 13 年（1842）の『御宝物図絵』では N-106 の「羯鼓」と本品を別々に描いているが、天板の窪みに鼓皮の位置がよく合うことから、当初より一具をなしていたと考えられる。

N-104 尺八（しゃくはち）

尺八は、唐時代の公的音楽である唐楽で 7 世紀後半頃から用いられた。三節取りした淡竹（はちく）の表裏に 6 個の楕円形の指孔（ゆびあな）を開け、上下に歌口（吹き口）と筒口を作る。竹の節の数と歌口の半月面の形などから、後世の一節切（ひとよぎり）とは区別され、珍重されている。

N-105 横笛（おうてき）

龍笛（りゅうてき）とも称し、尺八とともに唐楽の演奏楽器として用いられた。7 孔を開け、歌口（吹き口）と第 1 孔との間を 2 本の竹でつなぎ、孔を除く表面には桜の皮を巻きつける樺（かば）巻きが見られる。笛の頭端部を蜜蝋でふさぎ、先端には青地金欄（きんらん）を貼り、周囲に朱漆を塗る。「七弦琴」（N-102）などとともに法隆寺の西院に伝えられた。

N-103 琴柱（ことじ）

琴柱は琴や箏の弦を張り、音程を調節するために使う駒のこと。この琴柱は形状から、新羅琴（しらぎごと）の 12 本の弦を張るために使用したと考えられる。形状は裾（すそ）を広げた山形で、頂上に弦を渡す溝を彫り、底面に半月形の刳りをつける。表面には赤漆を施し、切箔（きりはく）の技法で葉状文や頂部の縁取りを表わしている。